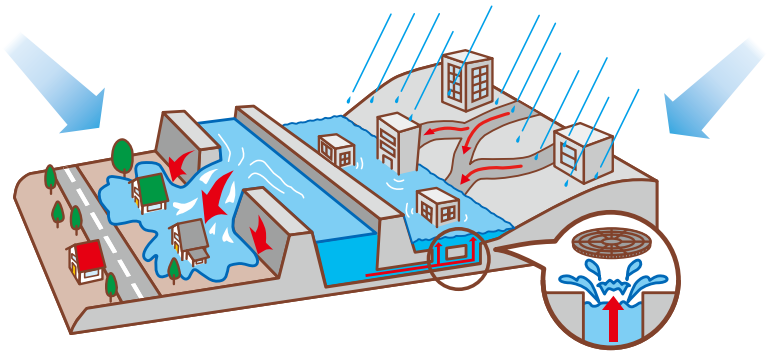
氾濫（洪水）・浸水害について

氾濫の種類

雨量の増加によってもたらされる氾濫には、川から水があふれたり堤防が決壊して起こる「外水氾濫」と、街中の排水が間に合わず、地下水路などからあふれ出す「内水氾濫」の２タイプがあります。

外水氾濫

大雨の水が川に集まり、川の水かさが増し堤防を超える、あるいは堤防を決壊させて川の水が外にあふれておきる洪水。
氾濫が起きると一気に水かさが増すため、最大の注意が必要。

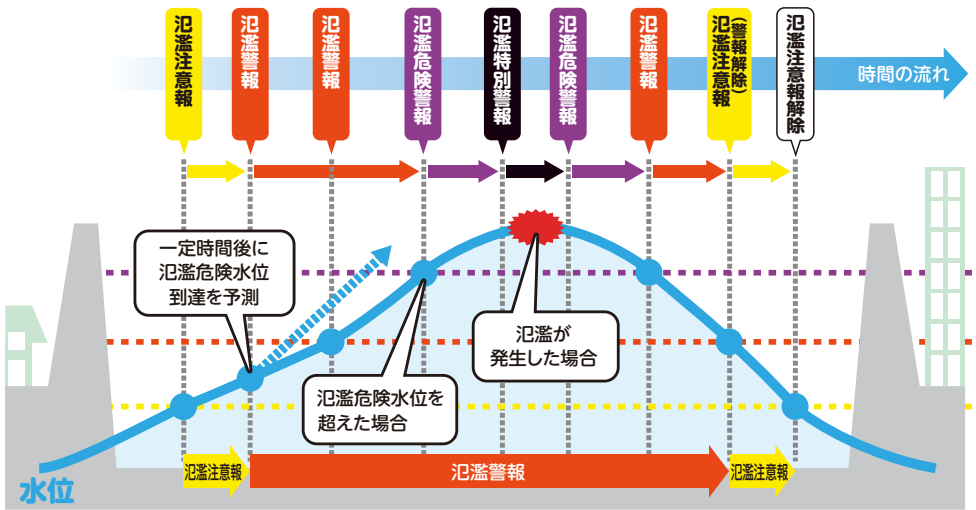


内水氾濫

その場所に降った雨水や、周りから流れ込んできた水がはけきれず溜まって起きる洪水。的確なタイミングで警報や避難指示を出すのが難しいため、注意が必要。

河川の危険水位と氾濫予報

河川ごとに設定された以下の危険水位に応じ、河川管理者と気象庁から氾濫予報が発表されます。自治体はこの情報を目安にして、避難に関する情報を発令します。



河川名	須川	小鶴沢川
観測所	鮎洗	大寺
氾濫危険水位（レベル４水位）	16.3	1.3
避難判断水位（レベル３水位）	15.9	1.1
氾濫注意水位（レベル２水位）	14.0	1.0
水防団待機水位	13.0	0.7

（単位：m）

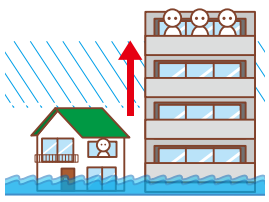
避難行動のポイント

浸水が始まる前に早めの避難を

氾濫水は勢いが強く、大人の膝程度の深さで歩行が困難となる。浸水してから自宅外への避難は危険。
気象予報や河川氾濫予報などの情報をもとに、身の危険を感じたら自主的に避難を開始する。

状況に応じた避難を

周囲の状況が危険で避難場所まで移動できない場合は、自宅や近隣の頑丈な建物のできるだけ高い階に避難する。
移動途中であっても、危険を感じた場合は、近隣の建物のできるだけ高い階に退避する。



やむなく浸水の中を歩く際は

裸足、長靴は厳禁。
水中で脱げづらい紐靴などが適している。
また、氾濫水は濁っているため、水面下が確認できない。
長い棒などを杖替わりとし、側溝やマンホール、障害物に注意する。

浸水した場合の深さの目安

●歩行移動

一般的に膝の高さである50cmを超えると水の中を歩行することが困難になる可能性があります。

●自動車移動

30cmを超えるとマフラーが水没してしまい、排気ができなくなるためにエンジンが停止する可能性が高まるので注意が必要です。

地下道（アンダーパス）にも警戒！

アンダーパスとは、道路や鉄道など立体交差する場合、その下を通る地下道をいいます。大雨・洪水などにより、アンダーパスの道路は真っ先に浸水してしまいます。地域のアンダーパスの場所を把握し、もしもの時に備えて迂回路を想定しておきましょう。普通自動車の場合、約30㎝の浸水で走行困難になります。
該当箇所には ☒ を表記しております。